



おとがわ



ふお～ゆ～

校長室だより

第 24 号

R3.9.27

文責 中西 勉



避難訓練 ～自分の命は自分で守る～

分散登校となったことで9月1日(水)から延期していた避難訓練を先週24日(金)に行いました。密を避けるために、2学年ずつ3回に分けて実施しました。4月の訓練に比べて静かに速く避難でき、「自分の命は自分で守る」という意識の高まりを感じました。現在の科学では、地震は明確に予知できません。いざという時のために、この心構えを育てていきます。



シリーズ「東京オリンピック」⑥ ～「攻め」の姿勢に学ぶ～

シリーズ第6回は、陸上男子4×100mRの決勝レースを振り返ります。私は、中学(※野球部と兼部)・高校・大学の計10年間、陸上部で汗を流しました。それだけに、今回は他の競技以上に陸上に期待していました。特に、陸上男子4×100mRは、北京五輪(2008年)で銀メダル、リオデジャネイロ五輪(2016年)で銀メダル、世界陸上でも2017年と2019年の二度、銅メダルを獲得しています。しかし、その当時は、日本人は誰一人として100mの「10秒の壁」を突破できていませんでした。ところが、今大会までに4人の9秒台ランナーが誕生し、私の期待は以前よりもさらに大きく膨らみました。

このように「史上最強」メンバーで東京五輪に臨んだ男子短距離陣でしたが、世界はそんなに甘くありませんでした。100mでは、出場した3名全員が予選で敗退するという厳しい現実と直面しました。そして、その雪辱を果たすべく4×100mRに臨みましたが、何とか決勝に駒を進めたものの、予選通過タイムは最下位の8位と、メダルから最も遠い位置で決勝を迎えることとなりました。

決勝レースでは、第一走者の多田修平選手が絶好の飛び出しを見せました。しかし、第2走者の山縣亮太選手へのバトンパスで、あの悪夢が起きました。まさか、日本チームが得意とするバトンパスでミスをするとは・・・。第3走者の桐生祥秀選手、第4走者の小池祐貴選手も含め、4人の選手は天国から地獄に突き落とされたような気持ちだったでしょう。LIVEで観戦していた私もショックで言葉を失いました。



試合後、4人はこの結果を「攻めた結果」だと振り返りました。予選8位という状況では、何も策を講じなければメダルに手が届きません。そこで、ギリギリを攻めるという選択をしましたが、結果は伴いませんでした。しかし、それにチャレンジした姿勢には、私は大いに学ぶところがあると思います。仮にバトンがつながっても、安全策のバトンではタイムが伸びず、メダル獲得は難しかったです。攻めずにメダルを逃してしまっていたら、より大きな後悔をすることになったのではないのでしょうか。

私は、職員に「チャレンジして失敗を恐れるよりも、何もしないことを恐れる」という本田宗一郎氏の名言を折に触れて話しています。私たちは、チャレンジ精神で物事に取り組み、男川っ子にもその姿勢を育てていきたいです。明後日から始まる小学校球技大会で、その姿勢が見られるとうれしいです。